

ロールシャッハ・スコアリングシステムの交流 (2) : 非患者群による両システムの相関研究

中京大学心理学部 明翫 光宣
中京大学名誉教授 八尋華那雄

Interchange between the Exner and Kataguchi scoring systems (2) : a correlational study between the two scoring systems in none-patient group

MYOGAN, Mitsunori (School of Psychology, Chukyo University)
YAHIRO, Kanao (Professor Emeritus, Chukyo University)

In this paper, we conducted a correlational study of the Exner and Kataguchi systems for scoring the Rorschach in a non-patient group (22 males, 47 females). The following results were obtained. In terms of reaction time, the average time for first responses (R1T) and Form-level (X+%, X-%) was correlated. In terms of content, H% had a characteristic trend of integrating blots and of having various determinant factors, while A% had a characteristic trends of simplifying information processing. In form-level, X+% (Exner system) and F+% (Kataguchi's system) were strongly correlated. The results of this correlational study improve our understanding both two scoring systems and Essential of Rorschach variables.

Key words: Exner system, Kataguchi system, correlation study

はじめに

筆者らは片口法, Exner法の異同を理解した上で, 両システムを相補的に活用していく視点について考察している(八尋・明翫, 2004~2006; 明翫・八尋, 2009)。その比較検討の中で理解されたことをまとめると以下である。

1点目は, 片口法は, Exner法に比較して学習しやすさも考慮してスコアシステムが簡略化されていること, その分だけ検査者の解釈の自由度が高いこと(解釈仮説の集約の根拠となる変数の取り上げ方が検査者によって若干異なる可能性もある)が挙げられる。一方, Exner法は逸脱言語表現など難易度の高いスコアを簡略化して詳細なスコアリングシステムが用意されていること, 実証的な側面を重視し, 解釈ストラテジーが定まっていることが挙げられる。

2点目は, 集計表と解釈ストラテジーの比較の違いである。Exner法は構造一覧表の解釈ストラテジーを基に解釈を進めていき, 数値に特徴が見られた場合などではさらにスコア継例を検討する作業に入る。いわば, Exner法は継時处理的に解釈仮説

を洗練していく。それに対して片口法では, 受検態度, 把握型, 決定因, 反応内容に沿ってロールシャッハ変数の示す意味や解釈仮説を複数設定し, 数値を読み進めるに従い被検者の本質的なパーソナリティ像の仮説をより洗練しながら絞り込んで出来上がっていく。つまり, 同時处理的に解釈仮説を作り上げていく方法と理解できる。また解釈全体の考え方として, 片口法は体験を統合性する力を, Exner法は情報処理や環境の関わり方の効率性や安定性に重きを置いているという点を考察した。さらにExner法に片口法の視点を導入することによって, 被検者のパーソナリティの独創性や柔軟性といったパーソナリティ理解を広げる可能性が示唆された。

これまでは両システムの施行法や解釈仮説を比較した論考であったが, 実際のデータによる両システムの変数間の対応関係はどのようになっているのだろうか。両システムの異同を考察した研究はいくつかあるが, 実際のデータを対応させた先行研究はまだ発表されていない。一方, 筆者らは, このテーマを考察していくにあたって同一ロールシャッハ・プロトコルを両システムで記号化し, 解釈することを試みてきた。今回筆者らは, 非患者群成人データを用いて両システムについて異同を考えて, 両シス

テムの理解を深める基礎データを提供することを試みたい。

・ 方法

(1) 調査協力者

精神科医療にかかっていない成人期・青年期事例69名(男性22名;女性47名)を対象とした。平均年齢は22.36歳,標準偏差は3.68であり,これらのデータは筆者らが既にデータベースとして保管していたものであり,主に大学生年代のデータとなる。

(2) 手続き

ロールシャッハ・プロトコルは,筆者らによって片口法とExner法にて記号化・整理を行った。全てのデータのスコアリングを筆者らが独立に記号化を行い,後に相互に照合し,スコアリングチェックを行い,スコアに不一致があった場合は後に合議で決定した。

(3) 分析

両システムの変数の相関関係を見ていくにあたって,反応数Rは多くの変数に影響を与えている可能性(小西,1999)を考慮して,反応数を統制した偏相関係数を算出した。なお,有意性の検定にはIBM SPSS Statistic22を用いた。

・ 結果

Table 1は反応時間(片口法)と包括システムの各変数との相関関係を示したものである。R1Tとは初発反応時間(図版を持ってから第一反応を産出するまでの時間)であり,NCとは無色彩図版,CCは色彩図版を示す。つまり,R1Tは10枚の全ての図版に対する平均初発反応時間であり,R1TNCは無色彩図版での平均初発反応時間,R1TCCは色彩図版での平均初発反応時間を示すことになる。

Table 1では,FQo,X+%に有意な負の相関関係が,FQu,Xu%,DV2に有意な正の相関関係が認められた。FQo,X+%のように適切な形態反応は,初発反応時間と負の相関関係にあったことが興味深い。一方,FQu,Xu%と正の相関関係にあることは被検者が個性的な反応を時間をかけて吟味し,産出していると考えると自然な結果である。

Table 1 反応時間(片口法)と包括システムの各変数との相関関係

	R1T	R1TNC	R1TCC
DQ+	-.069	-.036	-.099
DQo	-.064	.092	.035
DQv/+	.077	.008	.136
DQV	-.039	-.117	.048
FQ+	.016	.006	.007
FQo	-.268*	-.228	-.274*
FQu	.367**	.327**	.372**
FQ-	-.078	-.072	-.078
FQnone	.138	.061	.209
ペア反応	-.236	-.221	-.245*
Lambda	.104	.133	.068
EA	-.085	-.083	-.086
es	-.100	-.156	-.039
Zf	-.147	-.119	-.157
Zd	.165	.136	.165
Blend	-.175	-.196	-.145
<hr/>			
X+%	-.269*	-.253*	-.258*
WDA%	.087	.075	.086
XA%	.012	.024	.001
X-%	-.072	-.060	-.074
Xu%	.349**	.315**	.350**
S-%	-.011	.009	-.021
<hr/>			
DV1	-.015	-.066	.032
DV2	.286**	.182	.358**
INC1	.035	.018	.058
INC2	.126	.074	.167
DR1	-.069	.013	-.133
DR2	-.086	-.100	-.060
FAB1	-.177	-.130	-.189
FAB2	.019	.050	-.009
ALOG	-.221	-.178	-.210
Sum6	-.206	-.135	-.240*
WSum6	-.186	-.114	-.222
S-CON	.055	.034	.062
PTI	-.091	-.055	-.107
DEPI	-.023	-.073	.026
CDI	.150	.094	.191
HIV	.131	.119	.140
OBS	-.041	-.072	-.006

*...p<.05, **...p<.01

またR1TNCとR1TCCの差が30秒以上だとカラーショックを推定されているが(片口,1987),仮にカラーショック指標としてR1TCCとR1TNCの差を算出し,Table 1の結果とは別にExner法の各指標との相関係数を算出したところ,DQvのみ正の相関関係が認められた(r=.251,p<.05)。

なお,片口法R1TとExner法X+%の相関関係

に注目し、片口法 R1T を縦軸、Exner 法 X + % を横軸の散布図を示す (Figure 1)。本データの R1T の平均値が 13.39 秒 (SD = 8.46) であり、また片口法 (片口, 1987) では 30 秒以内が一般的とされている。一方、X + % は 0.55 ~ 0.85 の範囲にあること、特に 0.70 ~ 0.85 に入ることが期待値とされている (Exner, 2000 ; 2003)。

次に、片口法 R1T を縦軸、Exner 法 Xu% を横軸の散布図を示す (Figure 2)。Xu% は多くの被検者が 0.15 ~ 0.25 の範囲になること、0.25 を超えると個性的でありすぎるか、慣習的で社会的に期待される行動を無視する方向付けがあることを推測する (Exner, 2000 ; 2003)。

次に反応内容 (片口法) と包括システムの各変数との相関関係を Table 2 に示した。

まず、反応内容 (H%, A%, At%) と包括システムとの関係から検討すると、H% は非常に多くの指標と有意な相関関係があることがうかがえる。At% に関しては包括システムの指標と相関関係にある変数は少なく、Lambda と比較的強い正の相関関係を示した。反応内容は 1 つの指標だけではなく、いくつかの指標との組み合わせで相関関係をみていくと参考になる。

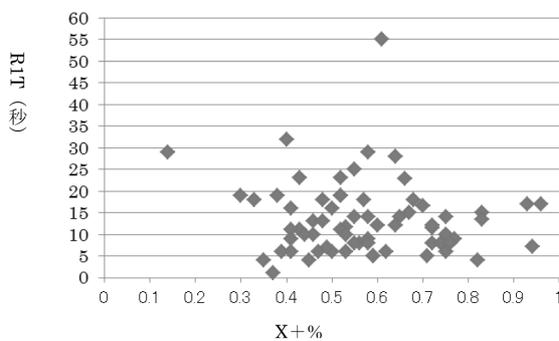


Figure 1 R1T と X+% の散布図

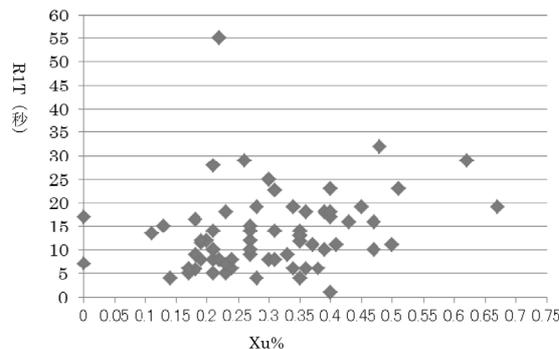


Figure 2 R1T と Xu% の散布図

例えば、発達水準では H% が DQ+ と正の相関関係に、DQo と DQv について負の相関関係を示した。一方で A% は、H% とは逆に DQ+ とは負の相関関係を、DQo とは正の相関関係を示した。このように H% と A% の相関係数が相反する変数は、EA, D, AdjD, Intellect, Zf, Blend, AB, GHR, PHR, HVI であった。病理的な指標である PTI とも有意な正の相関があるが、今回は非患者群で全ての事例において思考や認知の検討を要する PTI = 3 を超えるケースはなかったため、臨床群も含めたデータで改めて検討する必要がある。

次に CR (反応内容の豊富さ) との相関関係では、DQ+, ペア反応, active, Ma, EA など決定因とは負の相関関係にあり、DQv とは正の相関関係がみられた。

決定因との関連では、F% は決定因に関連する Exner 法の多くの変数と相関関係にある。F% と DQ+ との間に負の相関関係を、また DQo との間に正の相関関係を示したことが特徴である。DR (決定因の幅) は、DQv や DQv/+ と正の相関関係にあった。Exner 法の決定因に関する指標では、F% と EA と es と高い相関関係を示したが、EA と es は決定因と関与する変数にも関わらず、DR とは有意な相関関係に示さなかった点が今回の研究で明らかになった。

形態水準との関連では、F% と FQ+, X+%, XA% に負の相関関係が、FQu との間に正の相関関係がみられた。・ ・ /R は X+%, WDA% と負の相関関係に、X-% と正の相関関係がみられた。

特殊スコアとの関連では F% との相関関係がいくつか目立つ。F% が高いということは不適切な統合・反応 (INC1・DR2・PHR) が少なくなる一方で、良好な統合・反応 (COP・GHR) も少なくなる点が注目される。特殊指標については DR と S-CON との間に正の相関関係が、DEPI と ・ ・ /R との間に負の相関関係がみられた。

なお、片口法 H%, A% と Exner 法 DQ+, Zf のそれぞれの相関関係が高かった点に注目し、散布図を以下に示す (Figure 3, Figure 4, Figure 5)。

Figure 3 の H% は大まかには 10 ~ 25% が正常範囲内であり、25% を超えると対人関係において自意識が高く、過敏であるとされる (小野, 1991)。DQ+ は体験型にもよるが 5 ~ 10 が期待値である。Figure 4 の Zf は Lambda (片口法では F% に相当

Table 2 反応内容・決定因(片口法)と包括システムの各変数との相関関係

	H%	A%	At	CR	DR	F%	・	・	/R
DQ +	.642**	-.247*	-.200	-.281*	-.160	-.544**			.014
DQo	-.386**	.379**	.193	.028	-.069	.512**			-.092
DQv/+	-.181	-.182	-.107	.175	.312*	-.223			.042
DQV	-.393**	-.169	.085	.395**	.281*	.213			.144
FQ +	.168	-.174	-.113	.017	-.004	-.241*			.029
FQo	-.001	.121	-.025	.096	-.047	-.097			-.232
FQu	-.109	.065	.066	-.013	.014	.291*			.085
FQ -	.041	-.173	.008	-.147	.030	-.075			.237
FQnone	-.056	.028	.140	-.040	.216	.073			.092
ペア反応	.360**	.049	-.187	-.246*	-.223	-.346**			.023
自己中心性指標	.443**	-.091	-.210	-.143	-.155	-.368**			-.085
Lambda	-.427**	.153	.398**	.162	-.120	.891**			-.090
EA	.685**	-.373**	-.247*	-.262*	-.155	-.598**			.005
Es	.098	-.023	-.200	.017	.209	-.670**			-.035
D	.444**	-.246*	-.049	-.222	-.341**	.155			.061
AdjD	.490**	-.374**	-.069	-.179	-.171	.052			.111
active	.560**	-.147	-.247*	-.397**	-.195	-.684**			.031
passive	.524**	-.076	-.157	-.363**	-.323**	-.249*			.083
Ma	.664**	-.201	-.217	-.432**	-.330**	-.542**			.039
Mp	.412**	-.150	-.102	-.226	-.291*	-.071			-.164
Intellect	.318**	-.325**	-.065	.047	.225	-.285*			-.014
Zf	.440**	-.413**	-.119	-.025	.032	-.307*			-.215
Zd	.277*	-.143	-.192	-.045	-.012	-.152			.391**
Blend	.407**	-.269*	-.192	.001	.095	-.667**			-.066
Afr	-.044	.095	-.068	-.112	.012	-.076			.966**
X + %	.112	.064	-.074	.033	-.054	-.290*			-.283*
WDA%	-.061	.218	-.102	.061	-.192	-.010			-.311*
XA%	.134	.004	-.001	.021	-.069	-.301*			-.234
X - %	-.135	-.122	.008	-.030	.142	.066			.251*
Xu%	-.082	-.019	.009	.015	.028	.219			.044
S - %	-.035	-.171	-.053	-.040	.023	-.147			.185
Isolate	.109	-.381**	-.146	.167	.217	-.260*			.138
DV1	-.076	-.060	.173	.037	.232	-.084			-.045
DV2	.000	.061	.005	-.132	.132	-.042			-.046
INC1	.283*	-.150	-.176	-.186	.125	-.271*			-.051
INC2	.080	.068	-.034	-.155	.017	.020			.022
DR1	.156	.018	.064	-.211	.115	-.181			.189
DR2	.160	.032	.107	-.083	.007	-.249*			-.034
FAB1	.379**	-.153	-.049	-.348**	-.053	-.215			.246*
FAB2	.039	.226	-.096	-.287*	-.010	-.053			.218
ALOG	-.101	-.187	.030	.229	.179	-.020			-.028
AB	.405**	-.267*	-.090	-.041	.111	-.233			.064
AG	.236	-.086	-.282*	-.262*	-.281*	-.231			.066
COP	.381**	.037	-.110	-.147	.050	-.412**			.033
CP	.046	-.121	.052	.038	.287*	-.116			.126
MOR	-.093	-.111	-.118	.023	.054	-.083			.109
PER	-.005	.103	.058	-.082	.106	-.185			.232
PSV	-.286*	-.069	-.072	.157	.214	.052			-.072
GHR	.765**	-.312*	-.135	-.314**	-.381**	-.336**			-.121
PHR	.665**	-.278*	-.180	-.456**	-.237	-.348**			.129
WSum6	.315*	-.102	-.031	-.281*	.071	-.271*			.192
S - CON	-.308*	-.111	-.058	.253*	.306*	-.156			.194
PTI	.405**	-.174	-.086	-.355**	.025	-.236			.210
DEPI	-.092	-.199	.076	.188	.119	-.037			-.290*
CDI	-.367**	.088	.148	.160	-.015	.102			-.206
HIV	.371**	-.310**	.045	-.089	-.159	.105			.005
OBS	-.071	-.028	-.073	.033	.000	-.005			.019

*...p<.05, **...p<.01

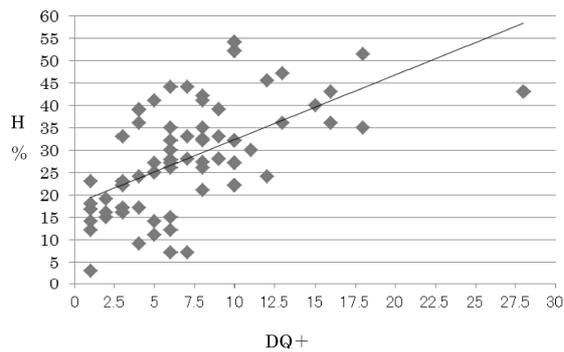


Figure 3 H%とDQ+の散布図

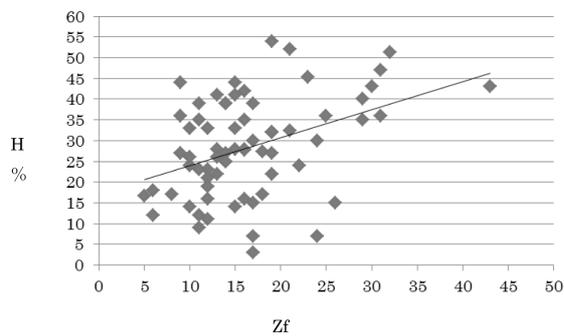


Figure 4 H%とZfの散布図

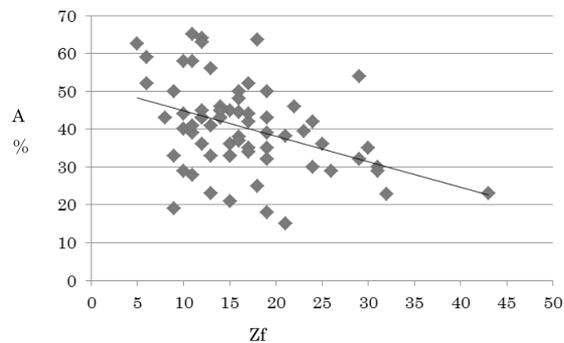


Figure 5 A%とZfの散布図

する)の数値にもよるが6~15が期待値となっている (Exner, 2000; 2003)。

Figure 5では、片口法のA%が縦軸であるが、小野 (1991) によればA%=20~60が期待値の範囲である。

最後に、片口法の形態水準指標・修正BRSと包括システムの各変数との相関関係について検討する。発達水準については、R+%とDQv/+との間の負の相関関係のみであった。また形態水準でもFQoとは正の相関関係、FQ-とは負の相関関係が見られるのみであった。包括システムの形態水準指標と片口法の形態水準指標との関連を見ると、WDA%

により強い正の相関関係が、X-%により強い負の相関関係が認められた。なお、Xu%とは有意な相関関係は認められなかった。

決定因の変数との関連では、F+%とF+%がDとAfrにそれぞれ負の相関関係を示した。F+%についてはAdjDとZfにおいても負の相関関係が認められた。さらに特殊スコア・特殊指標ではF+%との相関関係が目立っていたのが特徴である (DV1, INC1, CP, MOR, Wsum6, PTI)。非患者群でDR2がいずれの指標とも正の相関関係を示したのは質疑段階での明細化の過程で迂遠な言語表現が生じたと思われる。

修正BRSとの関連についてTable 3を一覧すると、形態水準 (FQo, FQ-, X+%, WDA%, XA%, X-%, S-%)と決定因の豊富さ (Lambda, es, Blend, COP)を意味する指標に相関関係にあることがうかがえる。

また両システムの形態水準指標の中で特に相関係数の高かった指標 (片口法 F+%とExner法 WDA%, X-%)の散布図を示す (Figure 6とFigure 7)。なお、縦軸は片口法 F+%、横軸はExner法のWDA% (Figure 6)、X-% (Figure 7)である。

考察

(1) 反応時間との対応について

Exner法では、当初反応時間の計測をしていたが、ロールシャッハ変数との相関がほとんどみられなかったという理由で、次第に反応時間の計測をしなくなった (包括システムによる日本ロールシャッハ学会, 2005 p60)。改めて今回非患者群を対象に相関関係に見てみると (Table 1), 確かに初発反応時間と相関係数にあるロールシャッハ変数は少ないが、今回の調査でFQoとX+%が低い負の相関、FQuとXu%が低い正の相関が認められたことに注目したい。またR1Tが片口では30秒以内とされるが筆者らの経験上では20秒が1つの目安であると考えている。Figure 1を見るとX+%が0.7以上の被検者はR1Tが20秒以内にほぼ収まっている。FQoやX+%に代表される良形態反応はたいいて比較的短時間で反応産出される場合が多いということであろう。また初発反応時間はカラーショックとの関連が解釈上検討されるが、本研究で仮にカラーショック指標としてR1TCCとR1TNCの差を算出

Table 3 形態水準（片口法）と包括システムの各変数との相関関係

	F + %	F - %	R + %	修正 BRS
DQ	-.151	-.167	-.023	.203
DQo	.215	.215	.197	-.124
DQv/+	-.151	-.170	-.306*	-.094
DQV	-.108	-.074	-.213	-.085
FQ +	.120	.141	.032	.065
FQo	.242*	.447**	.419**	.404**
FQu	.073	-.082	-.103	-.205
FQ -	-.568**	-.710**	-.555**	-.432**
FQnone	-.076	-.093	-.154	-.043
ペア反応	-.019	.055	.208	.224
自己中心性指標	.090	.023	.180	.285*
Lambda	.069	.019	.007	-.450**
EA	-.142	-.161	-.069	.282*
es	.153	.150	.110	.393**
D	-.241*	-.281*	-.160	-.133
AdjD	-.210	-.277*	-.221	-.111
active	-.124	-.127	-.015	.100
passive	-.063	-.020	.100	.227
Ma	-.170	-.143	-.003	.084
Mp	.029	.033	.115	.242*
Intellect	-.130	-.206	-.186	.169
Zf	-.221	-.314**	-.199	.176
Zd	.058	.092	-.081	.154
Blend	.096	.063	.074	.444**
Afr	-.316**	-.288*	-.194	-.118
X + %	.312*	.496**	.446**	.379**
WDA%	.541**	.672**	.494**	.317**
XA%	.269*	.395**	.308*	.258**
X - %	-.524**	-.669**	-.540**	-.460**
Xu%	.099	-.041	-.088	-.174
S - %	-.369**	-.398**	-.353**	-.301*
Isolate	-.131	-.081	-.083	.055
DV1	-.185	-.260*	-.169	-.034
DV2	-.042	-.138	-.113	-.003
INC1	-.051	-.253*	-.107	.234
INC2	-.133	-.222	-.125	-.038
DR1	-.175	-.174	-.050	.020
DR2	.269*	.279*	.268*	.178
FAB1	-.216	-.226	-.100	-.116
FAB2	-.137	-.163	-.075	-.208
ALOG	.003	-.101	-.105	-.196
AB	-.098	-.190	-.176	.171
AG	-.207	-.225	-.105	-.161
COP	.020	.117	.182	.277*
CP	-.154	-.286*	-.219	-.120
MOR	-.178	-.322**	-.229	-.139
PER	-.197	-.199	-.080	-.045
PSV	.023	-.067	-.087	-.281*
GHR	.035	.054	.109	.138
PHR	-.132	-.235	-.035	.101
WSum6	-.186	-.260*	-.087	-.003
S - CON	-.203	-.230	-.362*	-.079
PTI	-.161	-.311*	-.141	-.124
DEPI	.053	-.052	-.111	.023
CDI	.035	-.038	-.027	-.166
HIV	-.129	-.189	-.186	.059
OBS	.080	.192	.073	.026

*...p<.05, **...p<.01

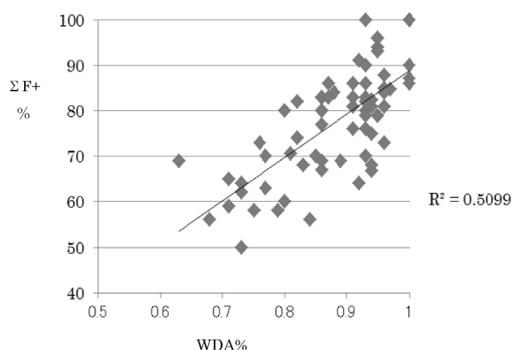


Figure 6 F + %とWDA%の散布図

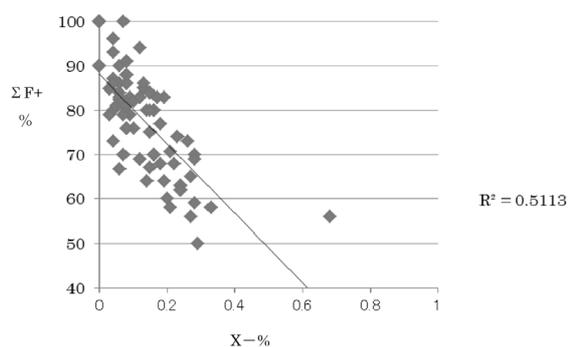


Figure 7 F + %とX - %の散布図

し、Exner 法の各指標との相関係数を算出したところ、DQvのみ弱い正の相関関係が認められた。色彩図版での初発反応時間の遅れが、形態要因に色彩要因をうまく統合できない過程（形態確定性の低下につながる）に表れると示唆された。

Figure 2 は、Figure 1 よりもはっきりした分布になっている。Xu% < 0.15 と FQu が少ないグループは初発反応時間が 20 秒以内である。一方、R1T が 20 秒を超えているグループは Xu% が高くなっていることが注目される。これらのプロトコルは個性的な反応や片口法の独創反応が多いということになる。FQu や片口法の O 反応が多いプロトコルは、図版を受け取ってからすぐに反応することなく慎重に反応産出していることがうかがえる。

初発反応時間は発達水準との相関が予想されたが、むしろ形態水準との間に反映されていたのは意外な結果であった。Exner 法は、FQu、Xu% の解釈に初発反応時間の知見がもっと反映されて良いと思われるし、片口法にとっても FQu の知見や Exner 法の形態水準表の活用は独創反応の評定に役に立つであろう。

(2) 反応内容との対応について

反応内容については、H%とA%が相反する相関関係になっているロールシャッハ変数が多かった。具体的には、DQ+, DQo, EA, D, AdjD, Intelect, Zf, Blend, AB, GHR, PHR, HVIであった。これらの変数のうち人間反応、人間運動反応が基礎になっている指標は、EA, D, AdjD, GHR, PHR, HVIである。逆にDQ+, DQo, Zf, Blend, ABは人間反応であることが直接影響しない指標である。H%とDQ+, Zfの散布図では(Figure 3, Figure 4), 人間像の認知はプロットの統合を伴いやすいということがわかった。この関係について、鈴木(1998)の「われわれは人間を認知するとき、彼(彼女)の動作・姿勢を解釈せずにはいられない習性をもっている(p299)」という人間運動反応に関する論考が参考になる。つまり、人間像を認知するときその人間像の動作・姿勢と同時に周囲のプロットを統合しつつ解釈しやすいという傾向が考えられる。また人間反応の割合が高いということは、プロット同士との統合だけではなく、決定因の豊富さに結びつきやすいことも本研究で示された。これらの知見やFigure 4, 5の分布を踏まえると、人間像と動物像とは相反する特質が反映されていると思われる。一方、H%・A%と形態水準(FQ, X+%など)においては両指標とも有意な相関関係になかったのは興味深い結果であった。これらの結果からExner法にH%やA%の知見がもっと活かされても良いと思われるし、新たな指標の開発では、例えばH:Aという組み合わせによる指標研究も今後のロールシャッハ研究の可能性を広げていくと思われる。

またCRとExner法の変数との関係においても、ほぼH%の相関関係と相反する関係で動いており、A%とはまた違う相関関係を示した。例えば、人間反応が高くなるほど、反応のレパトリー(CR)は低くなり、CRが高くなるほどDQvが高くなる傾向を示している。これは、被検者が具体的な人間像を多く見れば見るほど、反応の幅や形態半確定概念などが少なくなっていくことを示し、着想や選択肢の狭さを連想させる。これは、目に見えないものを想定することが難しいという阪大法の具象縛り(辻, 1997)を示していると思われる。逆に十分なH%でありながらCRの数も十分にあるというプロトコルは、被検者の知的能力や思考の柔軟性の高さがあるといった解釈仮説の可能性も考えられる。

(3) 決定因との対応について

F%が多くのExner法のロールシャッハ変数と相関関係がみられた。A%と同じようにH%と相反する相関関係(DQ+, DQo, EA, Intelect, Zf, Blend, GHR, PHRなど)があることから、F%はA%との親和性がうかがえる。

筆者らは、F%がExner法の形態水準指標に有意な相関を示したことに注目した。FQ+, X+% , XA%と負の相関関係、FQuと正の相関関係がみられたことから、F%は洗練化・明細化の乏しい反応や個性的なF反応(Schachtel(1966)の力動的形態反応)と関連すると考えられる。例えば、F%とFQuとの組み合わせから、Exner法の従来の洗練化・明細化の乏しい反応(High Lambda)の多いプロトコルか、Schachtel(1966)のいう力動的形態反応の多いプロトコルかを区別できるであろう。

・ ・ /RにおいてもX+% , WDA%と負の相関関係に、X-%と正の相関関係がみられた。ここから・ ・ /Rの高さと形態水準の良好さとが成立しにくい傾向がうかがえる。ここでも・ ・ /Rと形態水準指標との両立が被検者の色彩という影響に負けない認知的能力を査定するのに役立つ組み合わせとなる。

特殊スコアとの関連では、F%との相関関係がいくつが目立つ。F%の高さは、不適切な統合・反応(INC1・DR2・PHR)が少なくなる一方で、良好な統合・反応(COP・GHR)をも犠牲にしていると考えることが出来る。同じ決定因に関する指標であるDRは大まかにはH%と相反する形で連動した相関関係を示している。

(4) 形態水準との対応について

形態水準では、両法に大きな違いが見られることを以前に考察した(明翫・八尋, 2006)。まず片口法では、R+% (全ての反応の中で形態水準が良形態であるものの割合), F+% (F反応の中で形態水準が良形態のもの), F+% (形態確定的概念を用いた反応の中で良形態が占める割合)など決定因と形態水準との関連に焦点を当てている。それに対してExner法では、X+% (良形態反応), Xu% (稀少な形態の使用), X-% (歪んだ形態)など反応の形態水準別の割合を算出する他に、XA% (全体適切形態反応), WDA% (一般的な領域における適切形態反応), といった領域と形態水準との関連に焦点が当てられている。

FQ₀, FQ₋, X₊%, WDA%, XA%, X₋%, S₋%にそれぞれ相関関係があることは当然である。希少な反応については、片口法では初発反応時間とXu%と相関を示していた点は大きな特徴である。また相関係数の高さに視点を向けると、片口法ではF₊%が、Exner法ではWDA%とX₋%が他の変数との相関関係が特に高かった。WDA%が一般的な領域における適切形態反応であることを踏まえると、形態の一致度をもっとも反映させた片口法の形態水準指標はF₊%であり、F₊%を基準に解釈していくことがポイントになるといえる。またFigure 6・7をみると片口法とExner法の対応する形態水準指標の数値を見るとExner法がやや高い数値となっており、X₋%との対応ではほぼ数値が対応している点にも注目したい。

次に、片口法独自の指標である修正BRSとの対応について述べる。修正BRSは、形態水準(FQ₀, FQ₋, X₊%, WDA%, XA%, X₋%, S₋%)と決定因の豊富さ(Lambda, es, Blend, COP)を意味する指標は相関関係にあることがうかがえる。修正BRSは、複雑な計算式で算出され、どの要因によって影響を受けるか捉えにくい特徴があるが、今回の結果で形態水準と反応決定因の豊富さ(FQとBlend)の2つの要因と関連があることがわかった。この視点からの総合的指標はExner法にはなく、今後の研究の中で検討する価値のある指標と考えられる。

V. おわりに

今回、非患者群を対象に両システムの代表的な変数との対応を相関研究によって検討したところ両システムの理解だけではなく、ロールシャッハ変数の理解が深まった。主には以下の知見を得た。

片口法の初発反応時間の指標は主に形態水準指標との相関関係が認められ、重要な指標であることが確認された。反応内容ではH%とA%の数値の特徴が、決定因ではF%とFQuや形態水準と

／Rなどの組み合わせなど新たな指標の可能性がうかがえた。また形態水準については両システムともに複数の視点があるが、Exner法ではWDA+%が、片口法ではF₊%が両システムの接点であり、1つの基準として考えられる。

ロールシャッハ法は、臨床群においてさらにその査定力を発揮するアセスメントツールである。今後、

機会があれば臨床群における両システムの対応についても検討したい。

引用文献

- Exner, J. E. (2000). A Primer For Rorschach Interpretation. Rorschach Workshops (中村紀子・野田昌道監訳 2002 ロールシャッハの解釈. 金剛出版)
- Exner, J. E. (2003). The Rorschach: A Comprehensive System Volume 1 Basic Foundations and Principles of Interpretation Fourth Edition. John Wiley & Sons, Inc (中村紀子・野田昌道監訳 2009 ロールシャッハ・テスト; 包括システムの基礎と解釈の原理. 金剛出版)
- 包括システムによる日本ロールシャッハ学会 (2005). ロールシャッハとエクスナー: ロールシャッハ・テストの起源と発展. 金剛出版 P60
- 片口安史 (1987). 新・心理診断法. 金子書房
- 小西宏幸 (1999). 包括システムによるRの影響力. ロールシャッハ法研究, 3, 1-11
- 明翫光宜・八尋華那雄 (2006). ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法とExner法の比較 (3-2) 片口法の整理・集計・解釈準備段階について. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 5 (2), 35-45
- 明翫光宜・八尋華那雄 (2009). ロールシャッハ・スコアリングシステムの交流 (1) Exner法に片口法の視点を導入することの意義. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 9 (1), 37 - 44
- 小野和雄 (1991). ロールシャッハ・テスト: その実施・解釈・臨床例. 川島書店
- Schachtel, E. G. (1966). Experiential foundations of Rorschach's test. Basic Books, Inc (空井健三・上芝功博訳 1975 ロールシャッハ・テストの体験的基礎. みすず書房. pp.185-222)
- 鈴木睦夫 (1998). 『精神診断学』私見. 新・完訳 精神診断学 付 形態解釈実験の活用. 金子書房. pp. 297-305
- 八尋華那雄・明翫光宜 (2004a). ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法とExner法の比較 (1) 施行法と反応領域・発達水準などの記号化について. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 4 (1), 27 - 34
- 八尋華那雄・明翫光宜 (2004b). ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法とExner法の比較 (2) 反応決定因・形態水準評定・反応内容・平凡反応について. 中京大学心理学研究科・心理学部 4 (1), 35 - 44
- 八尋華那雄・明翫光宜 (2005). ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法とExner法の比較 (3-1) Exner法の特殊スコアと整理・集計・解釈準備段階について. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 5 (1), 19 - 36
- 辻悟 (1997). ロールシャッハ検査法: 形式構造解析に基づく解釈の理論と実際. 金子書房